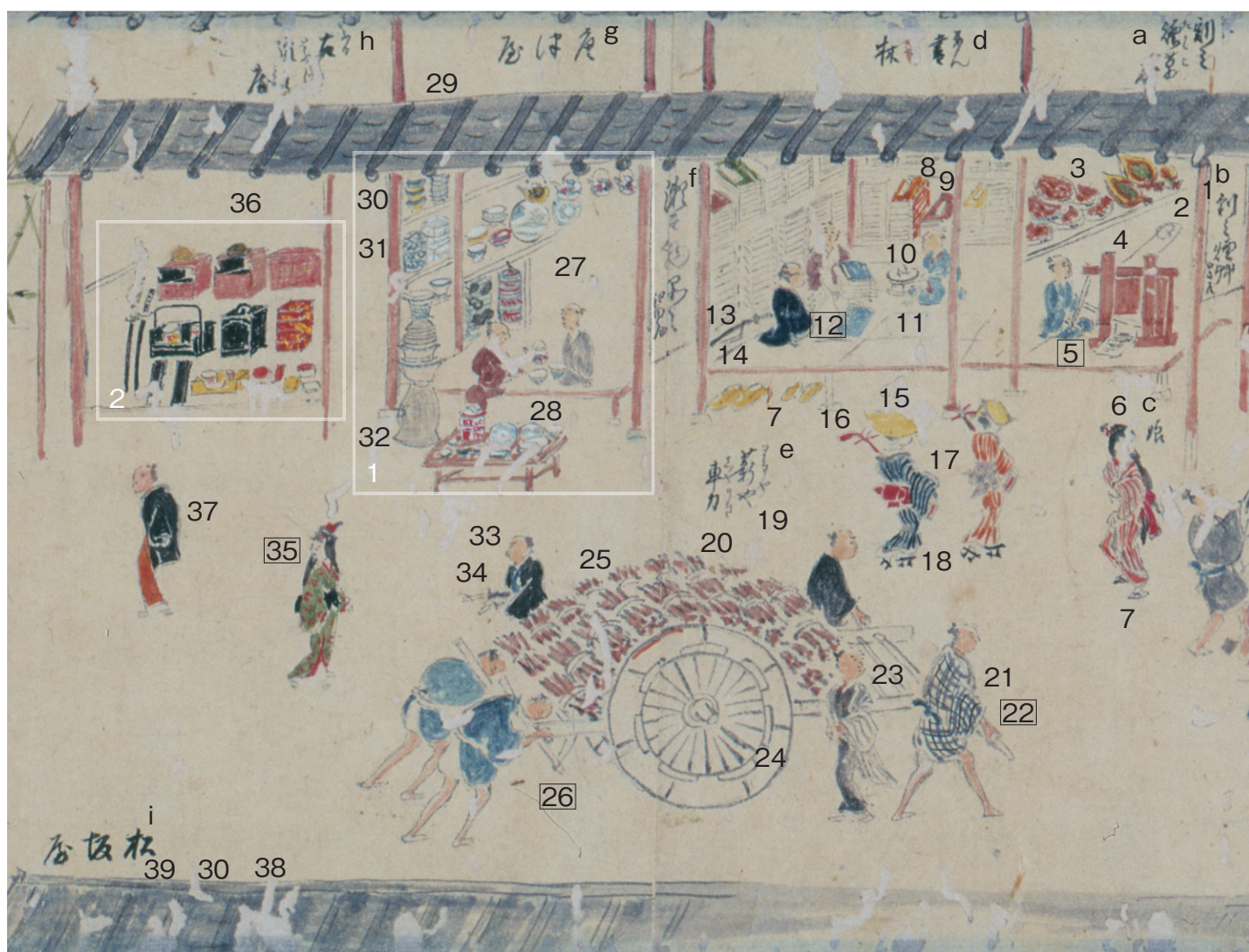


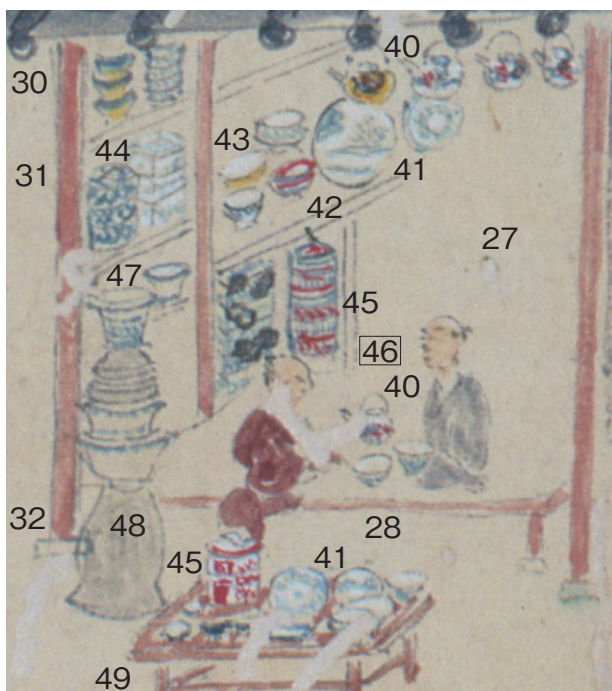
6 琉球人往来筋の賑わい (5)



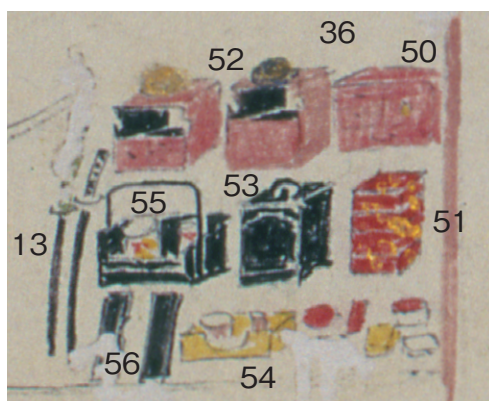
「刻ミ煙草屋」では、店内の棚に葉煙草が並べられており、店の者が刻み機で煙草を刻んでいるような様子が描かれている。看板には「刻ミ煙草／〇〇屋」と表記される。「書林」では、店内に多数の書籍が積み、本を読む客らしき人物の姿が描かれている。「唐津屋」には、染付皿や段重、碗類などが店内の棚に並び、店内の上部には色絵土瓶が吊るされている。店先には地面に伏せた陶器甕などのほか、店先に設置した見世台で各種の陶磁器が販売されている。店頭では、間口に腰かけた客と思しき人物と店の者と思しき人物が商談しているような様子が描かれている。看板には「瀬戸物品々／池田屋」とあり、東日本において陶磁器を指す語として広く使用された「瀬戸物」の呼称が用いられている。一

方、当該図の作者は、伊予の宇和島藩士である〔丹羽 2017〕ことから、看板に表記された「瀬戸物」の呼称ではなく、かつて西日本の各地で陶磁器を指す言葉として広く使用された「唐津」（唐津物・カラツモノ）の呼称〔大須賀・平岡・小川・寺澤 1921、徳川 1979〕を用いて、当該店舗を「唐津屋」と註記（表現）している（当該店の様子については、本書の「解題と考察Ⅵ」に詳述した）。

「古道具屋」には、黒塗り漆器の手付き煙草盆など、各種の煙草盆や、朱塗りの重箱（金時絵？）、俵形箱（重箱等の収納箱？）、日本刀などが描かれている。往来には、右側から、町娘、高下駄・編笠姿で三味線を手にした2人の鳥追い（女太夫）、大八車で薪を運搬する薪屋車力、二本差の武士、見返



部分 1



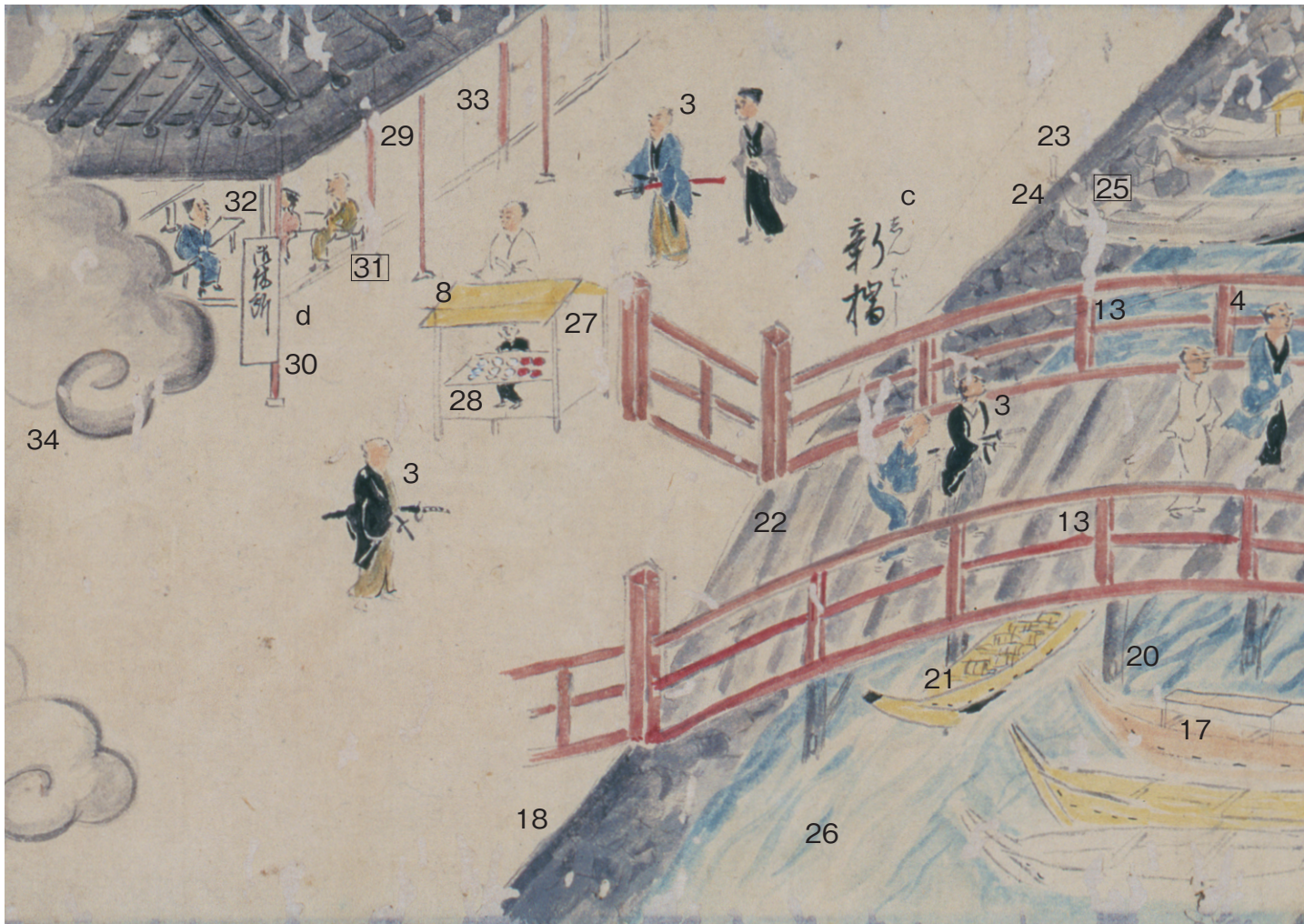
部分 2

り姿の女性、黒羽織を着た商人と思しき人物などの姿がみえる。喜田川守貞の『守貞漫稿』後集卷之三（駕車）によれば、当図のように大八車を4人で動かすことを「ヨテン」と称したという。画面手前にみえる瓦葺きは、呉服店「松坂屋」の屋根。芝口松坂屋については、中川芳山堂『江戸買物獨案内』下巻（文政7年刊）に「芝口壹丁目」の「呉服太物所」として「松坂屋八助」の名が記されており、またジェノヴァ東洋美術館には同店の正月初売りの様子を描いた柳文朝（2代目）による肉筆浮世絵も残されている〔西山1987・1988〕ほか、『江戸名所図会』掲載の「新橋／汐留橋」の図中にも店の姿が店名付きで描かれている（本書Ⅳ-5）。

（橋口亘）

- 1 看板「刻ミ煙艸／〇〇屋」
 - 2 煙草屋
 - 3 葉煙草
 - 4 煙草刻み機
 - 5 煙草を刻む
 - 6 娘
 - 7 草履
 - 8 本屋（書店）
 - 9 書籍
 - 10 火鉢
 - 11 畳
 - 12 本を読む
 - 13 刀
 - 14 刀架
 - 15 編笠
 - 16 三味線
 - 17 女太夫（鳥追）
 - 18 高下駄
 - 19 薪屋車力
 - 20 荷車（大八車）
 - 21 車力
 - 22 荷車（大八車）を曳く
 - 23 簀子
 - 24 車輪
 - 25 薪
 - 26 ヨテン（四天）
 - 27 瀬戸物屋
 - 28 框
 - 29 軒庇
 - 30 瓦葺
 - 31 柱
 - 32 礎石
 - 33 武士
 - 34 二本差
 - 35 見返る
 - 36 古道具屋
 - 37 黒羽織
 - 38 屋根
 - 39 松坂屋呉服店
 - 40 色絵土瓶
 - 41 染付皿
 - 42 見世棚
 - 43 碗類
 - 44 染付段重
 - 45 色絵段重
 - 46 商談する
 - 47 染付鉢
 - 48 陶器甕
 - 49 見世台
 - 50 引出し箱（朱塗り）
 - 51 重箱（朱塗り金蒔絵？）
 - 52 煙草盆（朱塗り）
 - 53 俵箱（重箱等の収納箱？）
 - 54 煙草盆
 - 55 煙草盆（手付き）
 - 56 文箱？
- a 刻ミ／煙草／屋
b 刻ミ煙艸／〇〇屋
c 娘
d 書／林
e 薪や／車力
f 瀬戸物品々／池田屋
g 唐／津／屋
h 古／道具／店
i 松坂屋

7 新橋



- 1 竹矢来 (虎落)
- 2 犬
- 3 武士
- 4 町人 (男)
- 5 町人 (女)
- 6 背負う
- 7 見物人
- 8 屋台
- 9 団子屋
- 10 団子
- 11 瓦屋根
- 12 子供 (女)
- 13 欄干

- 14 舟
- 15 船頭
- 16 棹
- 17 屋根船
- 18 石積
- 19 河岸
- 20 橋杭
- 21 積荷
- 22 橋板
- 23 舟杭
- 24 鱸網
- 25 舳う
- 26 川 (汐留川)

- 27 餅屋?
- 28 餅 (紅・白)?
- 29 水茶屋
- 30 看板「御休所」
- 31 腰を掛ける
- 32 腰掛
- 33 庇
- 34 雲

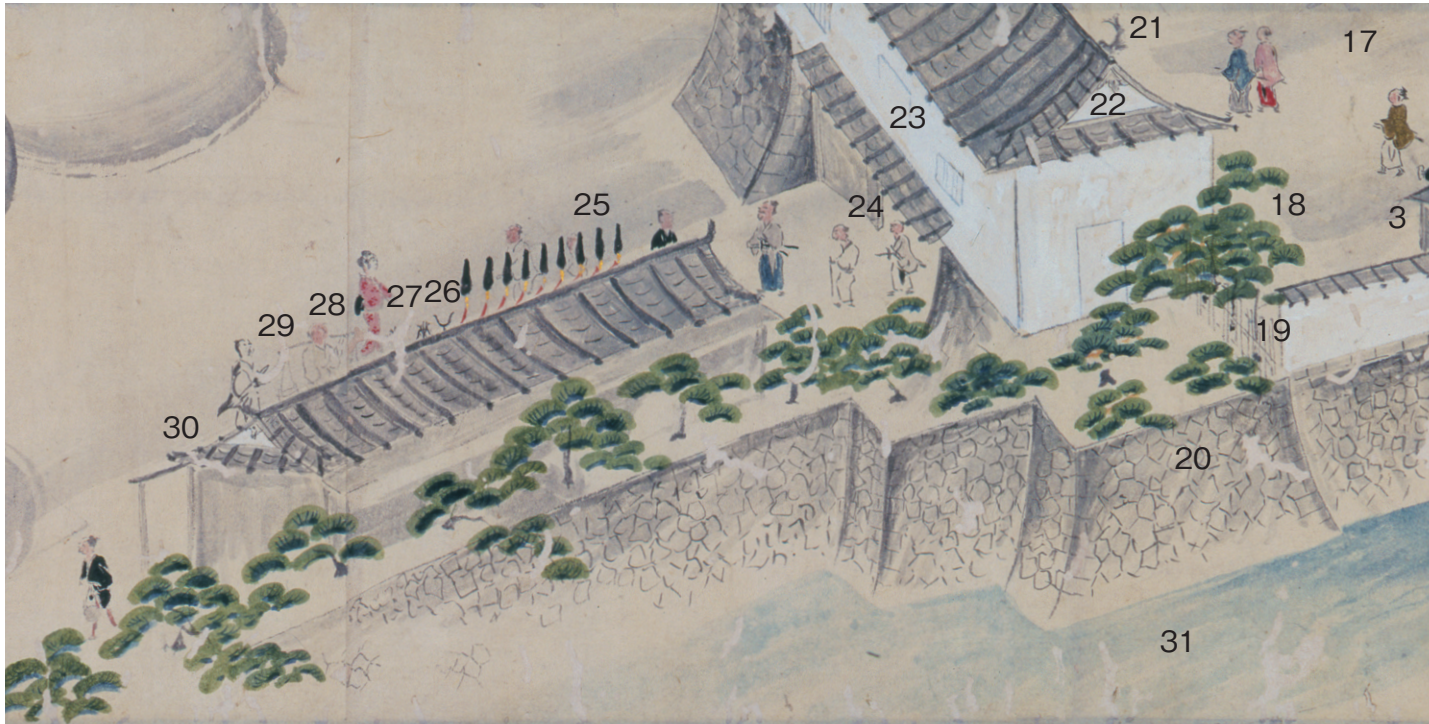
- a 此横町／芝口壺町目西側町
- b 西側町の先／二葉町
- c 新橋
- d 御休所



汐留川に架かる「新橋」(芝口橋)周辺の模様を描く。橋は北の芝口金六町、同北紺屋町と南の芝口一丁目の間に架かる。橋の北側の町屋のところに宝永7年(1710)の朝鮮通信使の参府に当たって、その前年ここに芝口御門が造営され、以後正式名称は「芝口橋」となったが、古称(俚俗名)の「新橋」で呼ばれることが多かった。橋は幅4間2尺、長さ10間、橋台9尺であった(「町方書上」文政10年)。橋は赤く塗られた木橋で、欄干に擬宝珠は見られない。橋の南詰には、使節の通行の際通りへ人が侵入するのを防ぐための竹矢来(もがり)が設けられている。琉球使節は東海道筋を北上し、新橋の手前で左に折れて芝口西側町、二葉町の北側を通り、幸橋御門から江戸城へと向かった。この竹矢来によって使節の径路が示されているともいえよう。画

面全体は使節の通過後の様子を描いているが、その竹矢来の後ろで群集している人々(武士も町人もまじっている)の様子は、使節通過時の模様を伝えているようである。竹矢来を隔てて3匹の犬が寝そべっている。橋のたもとにある仮設の店舗(屋台)では団子屋が団子売っている。芝口一丁目西側町の呉服屋松坂屋と汐留川の間には建物が見えている。ここは切絵図では描かれることが少ないが、「蔵地」となっている所で、川沿いに倉庫などが立ち並んでいた(本書Ⅳ-5『江戸名所図会』)。川には多くの船が舫っており、中には屋根船も見える。橋の下をちょうど荷物を積んだ船が通過しようとしている。橋の北詰には餅屋であろうか、紅白の食べ物を売る店が描かれ、「御休所」と看板が立てられた瓦葺の建物の水茶屋では人々が憩っている。(丹羽謙治)

8 幸橋見附



- | | | |
|----------|------------|-----------|
| 1 土橋 | 14 幸橋 | 27 袖搦 |
| 2 瓦葺 | 15 白壁 | 28 天秤棒 |
| 3 屋根（切妻） | 16 高麗門 | 29 水売り？ |
| 4 合羽籠 | 17 枳形虎口 | 30 見附番所？ |
| 5 合羽籠持ち | 18 松 | 31 川（汐留川） |
| 6 挟箱 | 19 柵 | |
| 7 挟箱持ち | 20 石垣 | |
| 8 徒士 | 21 鯨 | |
| 9 鎗（鞘付） | 22 屋根（入母屋） | |
| 10 鎗持ち | 23 櫓 | |
| 11 燈籠 | 24 櫓門 | |
| 12 番所 | 25 鎗 | |
| 13 欄干 | 26 刺叉 | |

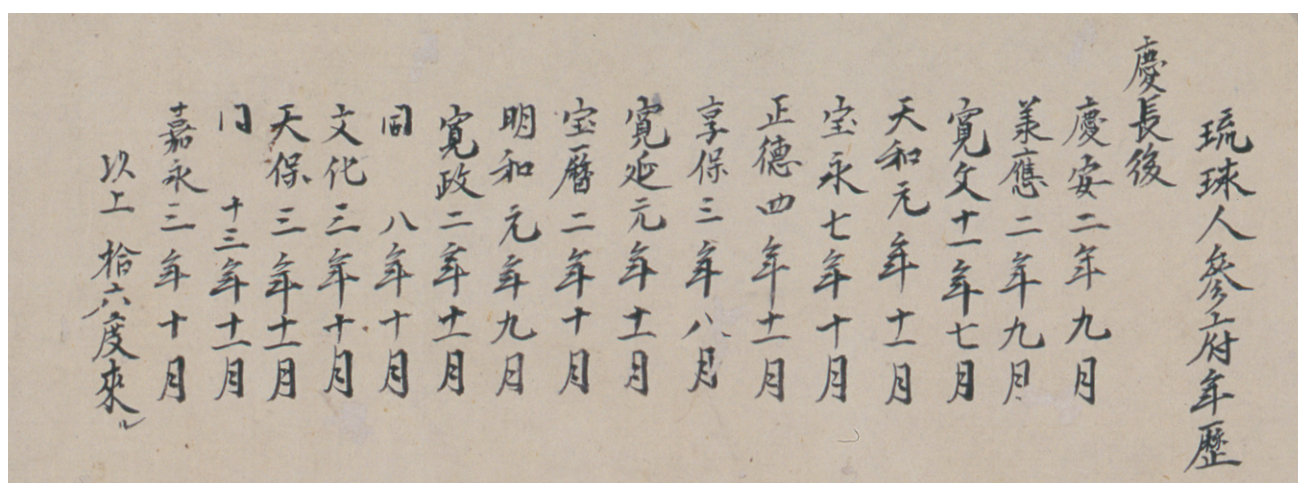
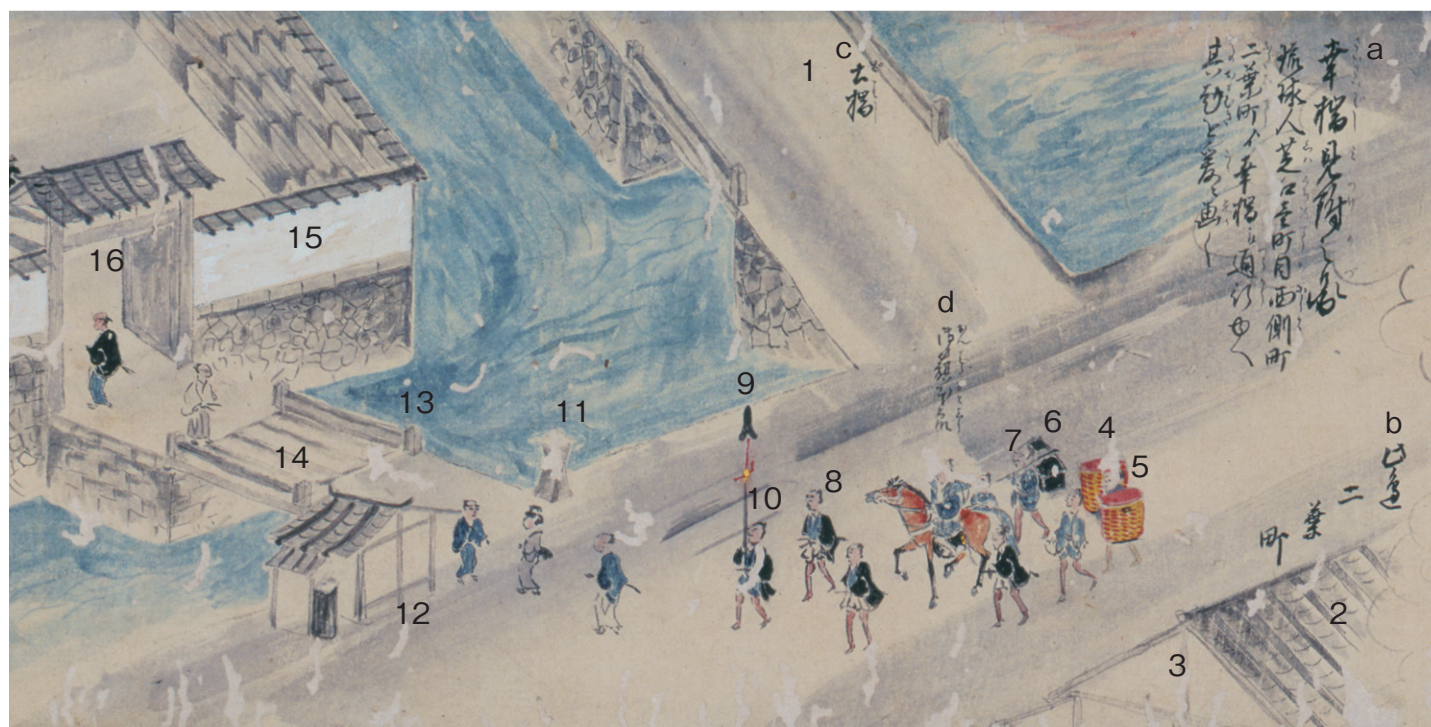
- a 幸橋見附之圖／琉球人芝口亭
町目西側町／二葉町幸橋江通
行ゆへ／其趣を爰二画く
- b 此邊二葉町
- c 土橋
- d 御旗本衆

「幸橋見附之圖／琉球人芝口亭町目西側町／二葉町幸橋江通行ゆへ／其趣を爰二画く」とあるように、琉球人行列が通行する幸橋見附附近の通りの様子を描いている。

幸橋見附は、現在の新橋付近に存在した江戸三十六見附の一つである。幸橋の奥に見える高麗門と櫓門を合わせた一角は、幸橋門あるいは御成橋門とも呼ばれ、虎口を兼ねており、江戸城の城門としての役割を果たしていた。虎口の形状は、高麗門を潜ったあと左に折れたところに櫓門を配置する枳形で、これは、敵の直進を防ぐのに加え、出撃の際

には四角い空間に城兵を待機させる武者溜の機能も果たすことができる、当時の最も代表的な虎口であった〔村田 1981、野中 2007〕。

その幸橋の手前を騎馬の旗本の一行が通過している。供連は3人の徒士と5人の中間で、その中には、鎗持ち、挟箱持ち、合羽籠持ちが含まれている。他の2名は、馬の口取りと草履取りであろうか。武士は、外出の際には、槍を立てて馬上で若党や手廻りを率いるのが一人前であるとされていた〔根岸 2009〕。本絵図の旗本の一行は典型的な武士の供連の様子を描いていると言えよう。



最後に慶長以後の琉球人参府の年歴が記されている。慶安二年（1649）、承応二年（1653）、寛文十一年（1671）、天和元年（1681）、宝永七年（1710）、正徳四年（1714）、享保三年（1718）、寛延元年（1748）、宝暦二年（1752）、明和元年（1764）、寛政二年（1790）、寛政八年（1796）、文化三年（1806）、天保三年（1832）、天保十三年（1842）、嘉永三年（1850）を挙げ、「以上拾六度来」（以上16度来る）と記されているが、これ以前の、寛永十一年（1634）、正保元年（1644）にも参府が行われているため、実際には、これらを加えた18件であった。また、「慶安二年

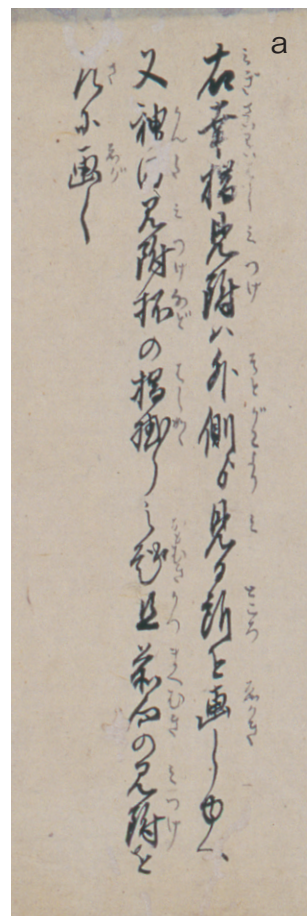
九月」とあるが、これは「慶安二年七月」の誤りである可能性が高く、他にも「天和二年四月」とあるべきところが「天和元年十一月」と記されているなど、他の琉球国使節の史料とは異なる年月が記されている箇所がいくつか見られる。このような他史料と異なる年歴の記述は天保3年刊行の史料から既に見られるが、中でも、本絵図は、年月の一致や記述様式の類似から『琉球人行列道順附』（天保13年）[州立ハワイ大学1981]等の影響を受けていると推測される。

（駒走昭二）

9 下城 (1)



- 1 擬宝珠 (ぎぼし)
- 2 欄干
- 3 挟箱
- 4 毛鎗
- 5 駕籠
- 6 扉
- 7 門
- 8 高麗門
- 9 台笠
- 10 立傘
- 11 刺叉
- 12 不明

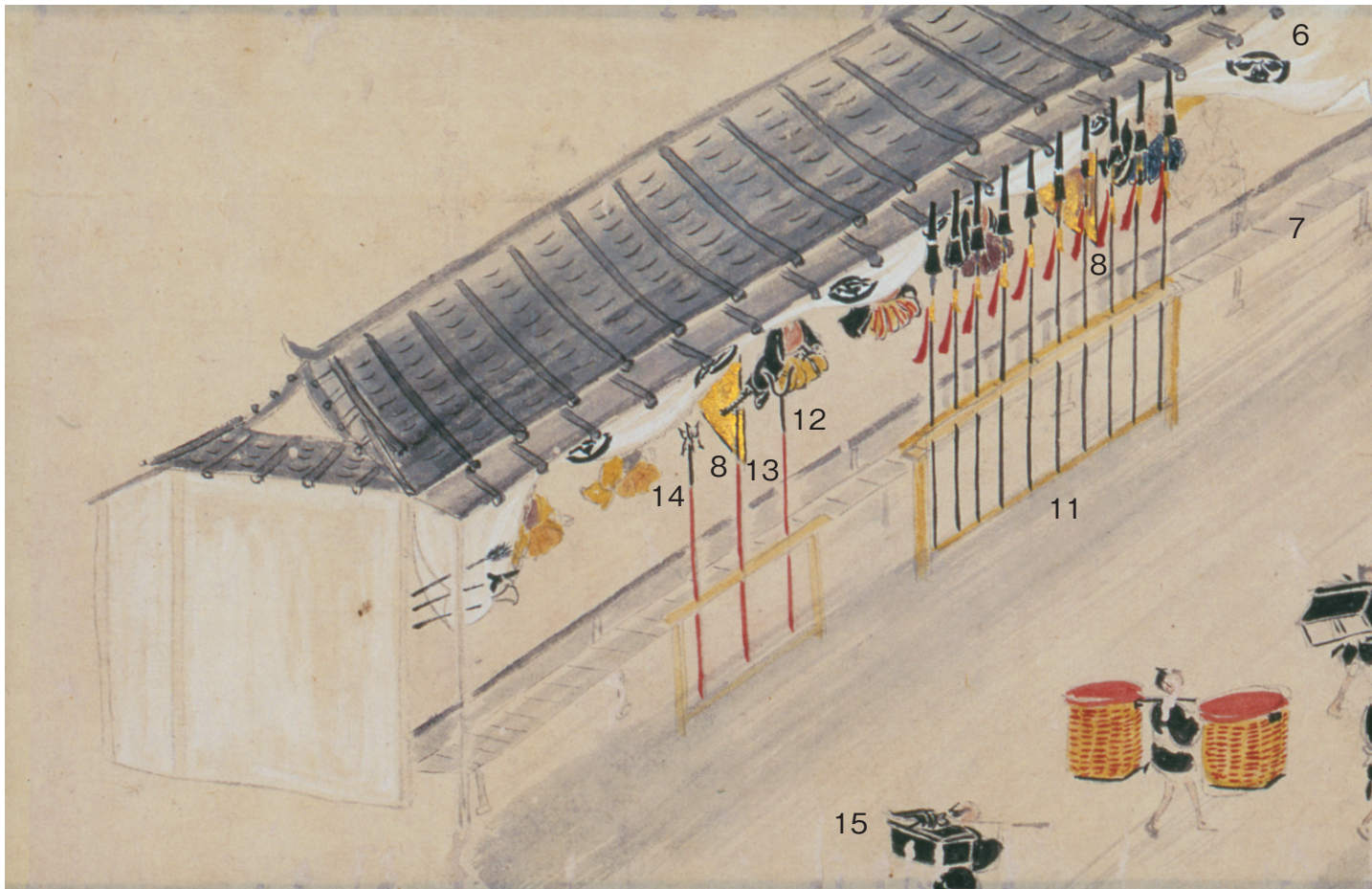


a ミギさいわいはし ミつけ そとがはより ミ ところ 糸かき 右 幸 橋見附ハ外側を 見る所を画しゆへ／又神田見附杯の橋掛り之 趣、且前向の見附を／左に画く
b おんたいミやう こ とじやうおんさが 御大名／御登城 御下り

本図は、詞書きの「左」にあり、「神田見附杯の橋掛り之趣、且前向の見附」にあたり、神田橋御門だろうか。「前向の見附」は未詳。擬宝珠は特別なもので、江戸城の門に通じる橋に許された。ほかには日本橋などわずかな橋にしか許されていない〔小澤・小林 2006：89〕。橋を渡った内側の門はますがた枡形門の外門で、形式は高麗門。大名の乗る駕籠が門を出

ようとしており、行列は橋を渡って下城している。行列の前方にある挟箱には金泥がみえ、家紋か。門の内側にある箱のようなものは未詳。城内での行列の人数は規制されるが、これでもやや多いか。行列の人々は、尻端折りをし、裸足のように見える。後方に乗馬した人もいる。(得能壽美)

10 下城 (2)



- 1 しゃちほこ 鯨
- 2 櫓門
- 3 馬柄杓 (馬杓)
- 4 合羽籠
- 5 行列
- 6 陣幕
- 7 見張り番所 (見附)
- 8 金屏風
- 9 鎗 (鞘付)
- 10 鎗持ち
- 11 飾り鎗
- 12 さすまた 刺叉
- 13 つくぼう 突棒
- 14 そでがらみ 袖搦
- 15 押え箱

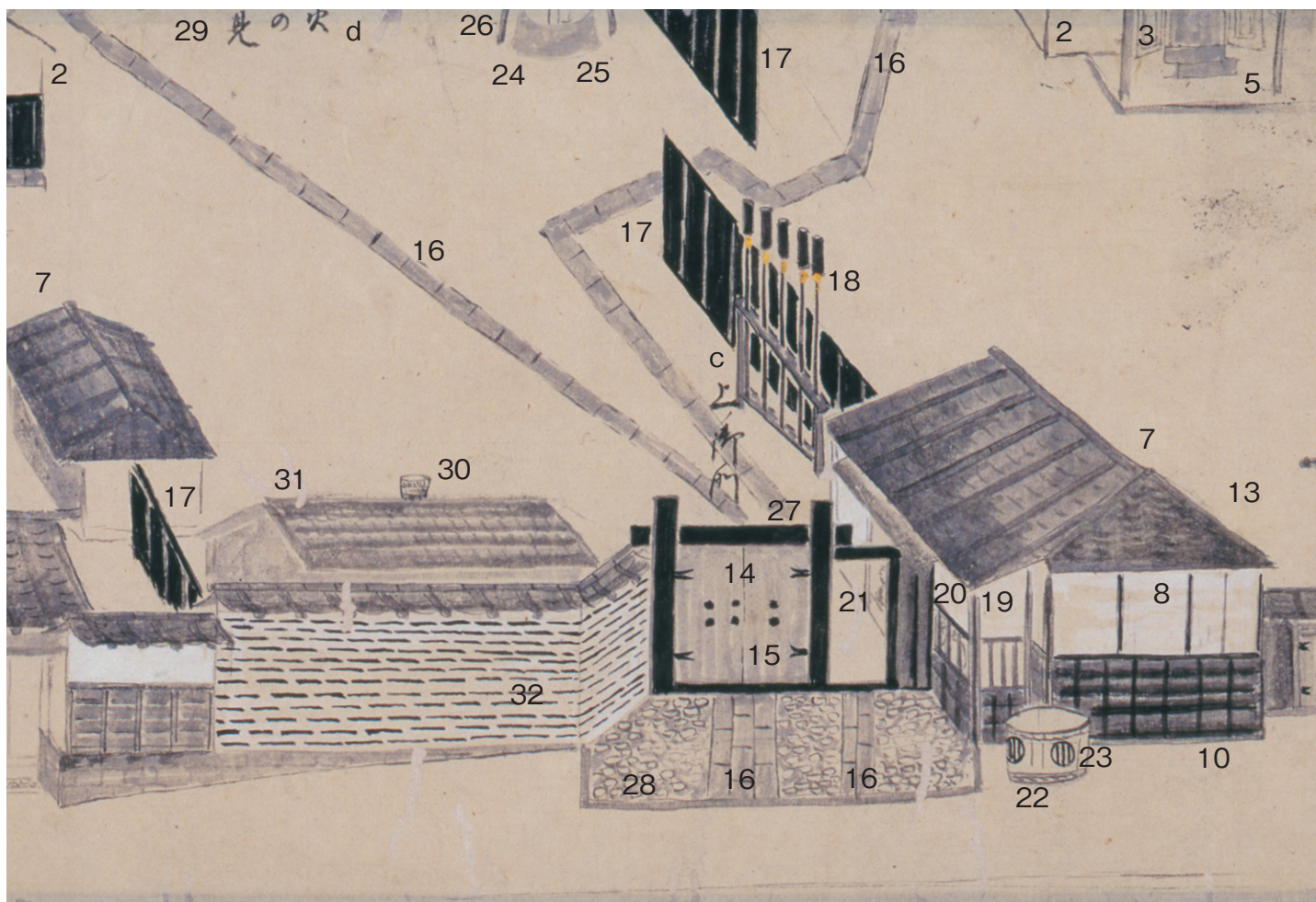
a 騎馬供



ますがたもん
 枡形門のうち内門である櫓門やぐらもんを行列の後尾が通過していく。石垣の間を渡す門櫓で、渡り櫓とも称される。二階の平屋の多聞櫓を載せる。城門の見張り番所を見附といい、本図が神田橋御門であれば、とくに将軍が上野寛永寺に参拝する御成道であった。そのため長柄の槍などのほかに鉄砲が常備されていたという。見張り番所（見附）には、飾り鎗

(10 本) などの武器がおかれ、番兵が詰めている。右端の人物は線画だけで、彩色されていない。その左に金屏風の右端とみられる金泥がみえ、左端とみられる金泥は突棒の後ろにみえる。行列最後の箱を「押え箱」といい、大名の衣装や夜具を入れていた。
 (得能壽美)

11 宇和島藩上屋敷 (1)



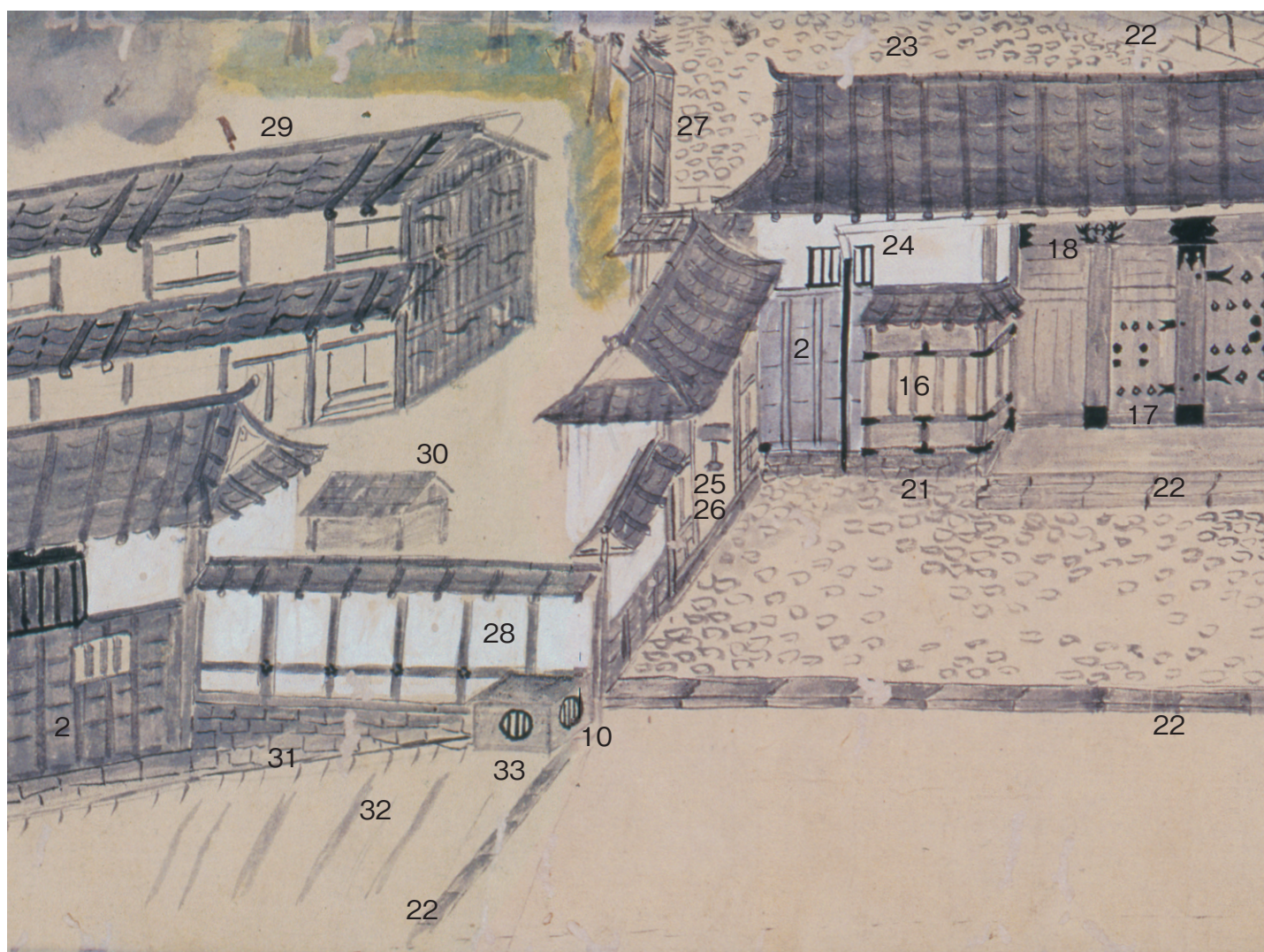
- | | | |
|-----------|-------------|---------------------|
| 1 樹木 | 17 黒堀（見隠し） | a 御園許御家中幼稚之輩江江戸 |
| 2 土蔵 | 18 鎗（鞘付） | りう ど おん や しきまへ おもむき |
| 3 扉（両開き） | 19 門番所 | 龍土／御屋敷前の趣をも拝見致 |
| 4 石段 | 20 門番 | させんと／筆序に又爰に載す |
| 5 柱 | 21 礼場 | b 御小性間／御長屋 |
| 6 長屋 | 22 天水桶 | c 上ノ御門 |
| 7 瓦屋根 | 23 家紋（豎三引両） | d 火の見 |
| 8 白壁 | 24 井戸 | |
| 9 格子窓 | 25 井戸側 | |
| 10 腰板 | 26 釣瓶 | |
| 11 柵 | 27 門（上ノ御門） | |
| 12 並木（杉？） | 28 玉砂利 | |
| 13 門（車門） | 29 火の見櫓 | |
| 14 乳鉢 | 30 天水桶 | |
| 15 八双金具 | 31 消防小屋 | |
| 16 敷石 | 32 練堀 | |



江戸麻布龍土（現在の港区六本木7丁目）にあった宇和島藩上屋敷の模様を描いている。現在この土地は、国立新美術館および政策研究大学院大学となっている。絵には描かれないが、杉かと思われる木立の手前には、当時、肥前鹿島の鍋島甲斐守の上屋敷があった。柵と直角に宇和島藩の「御小性間御長屋」が描かれる。嘉永5年の「江戸麻布龍土御屋敷絵図」（本書Ⅳ-11）では「鍋島河岸御長屋」とある。その隣の瓦屋根の建物との間に小さな両開きの門があり、前述の「御屋敷絵図」では「車門」とある。名前のとおり、大八車などの車両の出入りに使われたものだろうか。門の向かって左側の建物は、「御屋敷絵図」に「御門番／机場」とあり、門番がここに詰め、人の出入を監視した。商人などの来訪者の入邸の際には木札を渡し、出邸の際これを

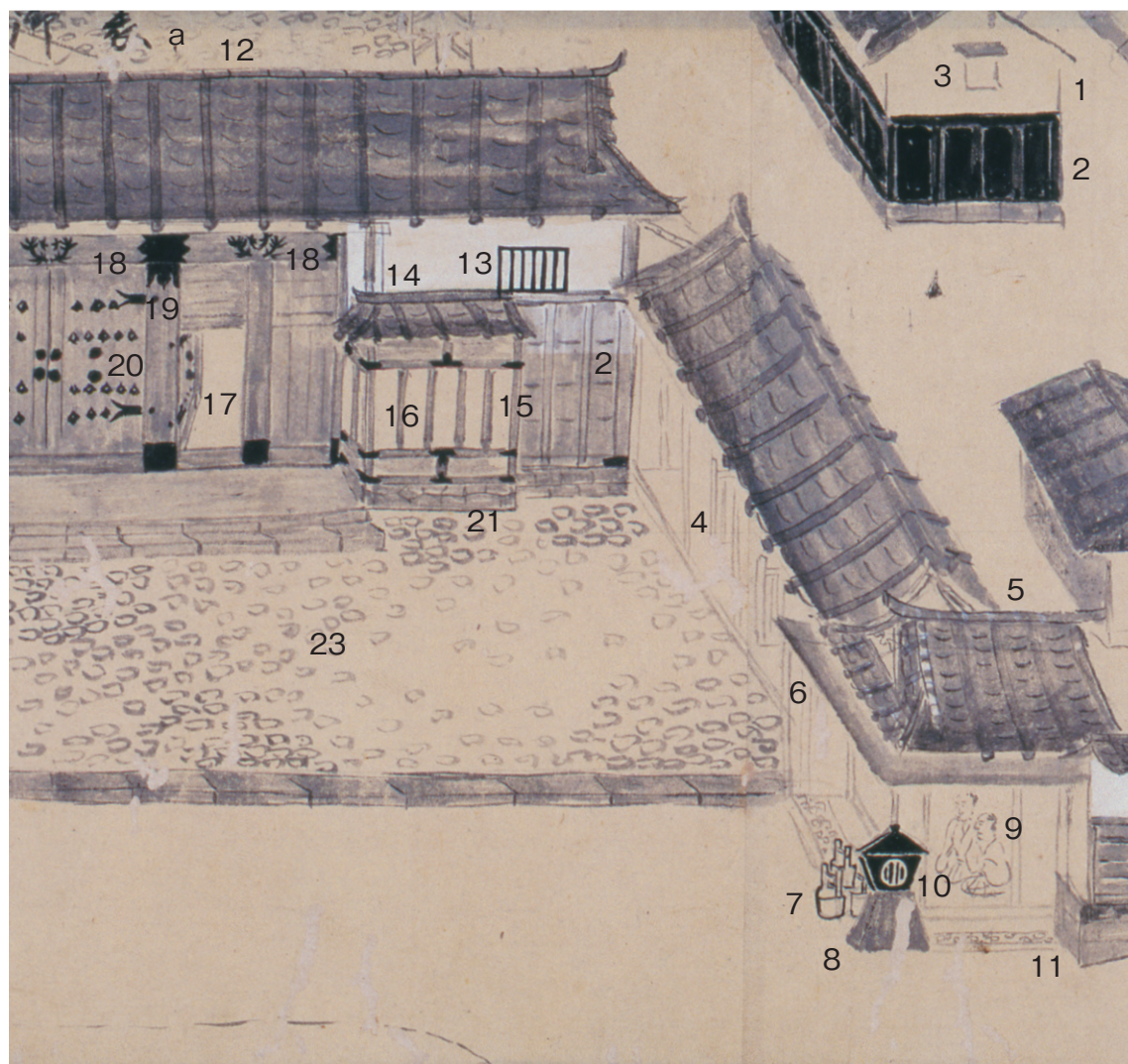
回収した〔高橋 2001〕。門番所前には宇和島伊達家の家紋（替紋、豎三引両）を入れた天水桶が置かれている。その左は「上ノ御門」で、冠木門の形式をとる。門前には玉砂利が敷かれ平石の舗装が二筋ある。その左には練堀があり、堀越しに天水桶を屋根に置いた建物が見える。これは前掲「御屋敷図」では「消防小屋」、その左奥の建物は「稽古部屋」とある。屋敷の内部には敷石が見え、仕切りとして黒い板堀が目隠し（見隠）として使われている。この目隠しの板堀は、屋敷の公的な空間と私的な空間を仕切るものであろう。その公的な空間である上ノ御門の奥に槍が5本描かれている。屋敷の奥（絵図の上部）には、井戸や火の見などが描かれ、2棟の土蔵が関東風の観音開きの扉を開いた状態で描かれている。（丹羽謙治）

12 宇和島藩上屋敷 (2)



宇和島藩上屋敷の「表御門」周辺の風景を描く。宇和島藩は十万石であるが、門の形式は五万石以上十万石未満の格式のものである（文化9年（1812）序『要筐辨志年中行事』）。表御門に向かって右側の歩廊状の建物は「馬繫^{うまつなぎ}」で、通りに面して辻番所があり、2人の藩士が詰めているのが見える。傍らの常夜燈には豎三引^{たてみつ引きりょう}両の紋が付けられている。この辻番所の位置は切絵図と一致する。門前の通りと平行に切石が一行に並んでおり、門との間には一面

に玉砂利（小石）が敷かれている。門の両開きの扉は閉ざされている。門には乳鉾^{ちびょう}や八双金具^{はっそうかなぐ}が打たれ、梁には伊達家の定紋の「竹に雀」紋をあしらっている。左右には潜り戸が設けられ、向かって右の潜り戸は開いている。さらにその両側には格子窓をもった両番所がしつらえられている。「江戸麻布龍土御屋敷絵図」では、ここは「御門番」という記載になっている。番所の屋根は瓦葺き切妻破風で、十万石を超える大名家のもの（唐破風）と比べると

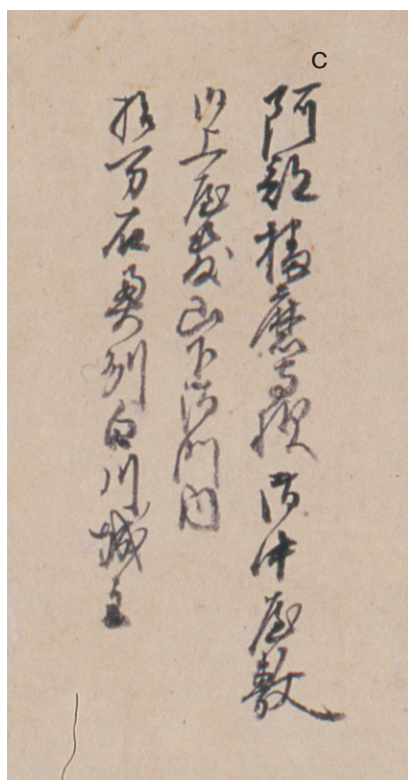


- 1 蔵
- 2 腰板
- 3 窓
- 4 馬繫
- 5 辻番所
- 6 庇
- 7 手桶
- 8 常夜燈
- 9 番人
- 10 紋（たてみつびきりょう）
- 11 雨落ち
- 12 表御門
- 13 格子窓
- 14 番所
- 15 瓦葺切妻破風（きりつまはふ）
- 16 格子
- 17 潜り戸
- 18 紋（竹に雀）
- 19 八双金具
- 20 乳鋸
- 21 石垣
- 22 敷石
- 23 玉砂利
- 24 樋
- 25 机？
- 26 腰掛
- 27 塀
- 28 築地塀（ついでい）
- 29 長屋（二階建て）
- 30 小屋
- 31 石積
- 32 坂道
- 33 天水桶？
- a 表御門

一段低い形式をとっている。門の左に目を移すと、門の近くに番所様の棟が見えるが、これは「腰掛」で訪問客の従者が主人を待つところである。これに接続して築地塀が続く。築地塀の前に置かれた家紋入りの器物は天水桶であろう。表御門は平坦な土地に建てられているが、その左から土地は傾斜して全体が下がっている。手前の道も坂道を表す線が描かれている。藩邸の内部には土蔵が右奥に、表御門の内側に砂利が敷かれた空間と敷石が見える。左奥の

二階建ての建物は、「御屋敷絵図」によれば「御目付長屋」である。絵巻には描かれていないが、表御門の左奥に御殿があった。御殿に向かって敷石が3列敷かれている。御殿は台地の平坦部に建てられており、南側の谷地（おかめだに）（於亀谷）が下級武士などの居住空間で、その境界には築地塀が設置されていたことがわかる。
（丹羽謙治）

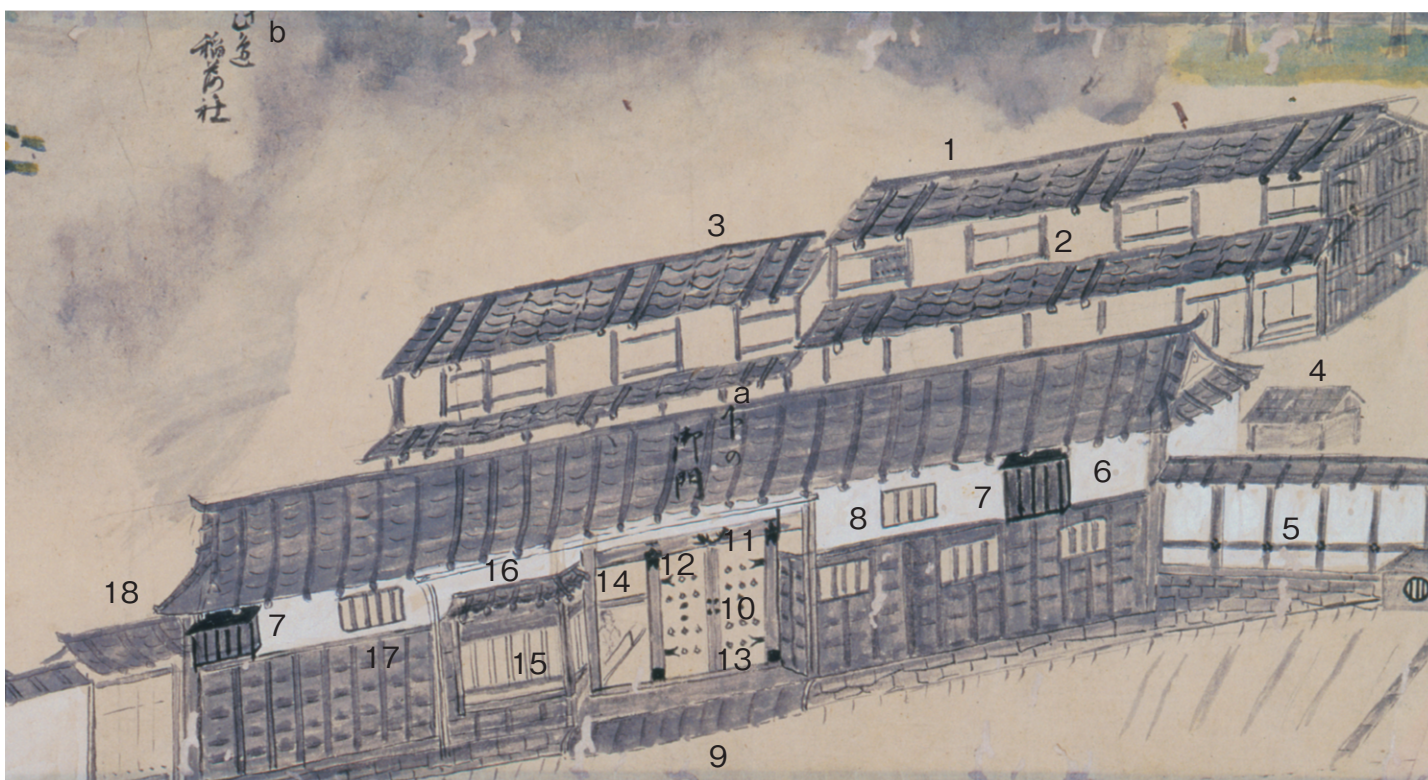
13 宇和島藩上屋敷 (3)



- 1 長屋
- 2 窓
- 3 瓦屋根
- 4 小屋
- 5 築地堀
- 6 白壁
- 7 出格子
- 8 格子
- 9 長屋門
- 10 門 (下の御門)
- 11 紋 (竹に雀)
- 12 八双金具
- 13 乳鋳

- 14 門番
- 15 番所
- 16 樋
- 17 腰板
- 18 門
- 19 樹木

- a 下の御門
- b 此邊／稻荷社
- c 阿部播磨守様御中屋敷／御上屋敷山下御門内／拾万石奥州白川ノ城主

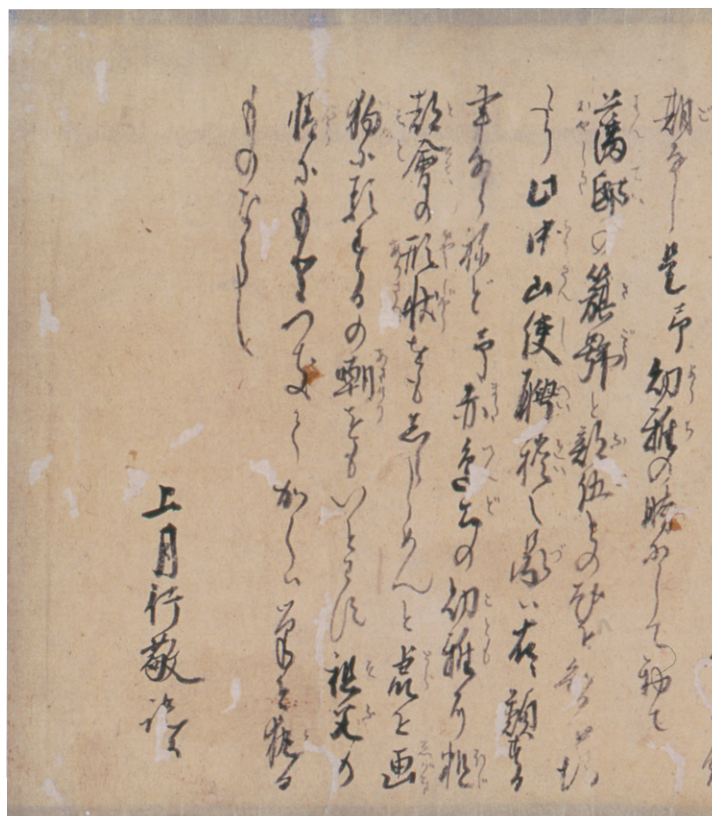


宇和島藩上屋敷の「下の御門」の周辺の様子を描く。この門一帯は南（向かって左）に下がる傾斜地（於亀谷^{おかめだに}）に建てられている。典型的な長屋門で、中央の門扉の左は通用口で、門番が1人描かれている。扉の上の梁には、表御門同様、伊達家の定紋（竹に雀）がつけられている。「江戸麻布龍土御屋敷図」による下の御門の長屋には「御小人床」と記載があり、下級武士の住居であったことが知られる。長屋門と築地塀との間には屋根を持った小門がある。隣家との境をなす築地塀は漆喰をぬった白壁と石積からできており、屋敷奥へと続いている。その

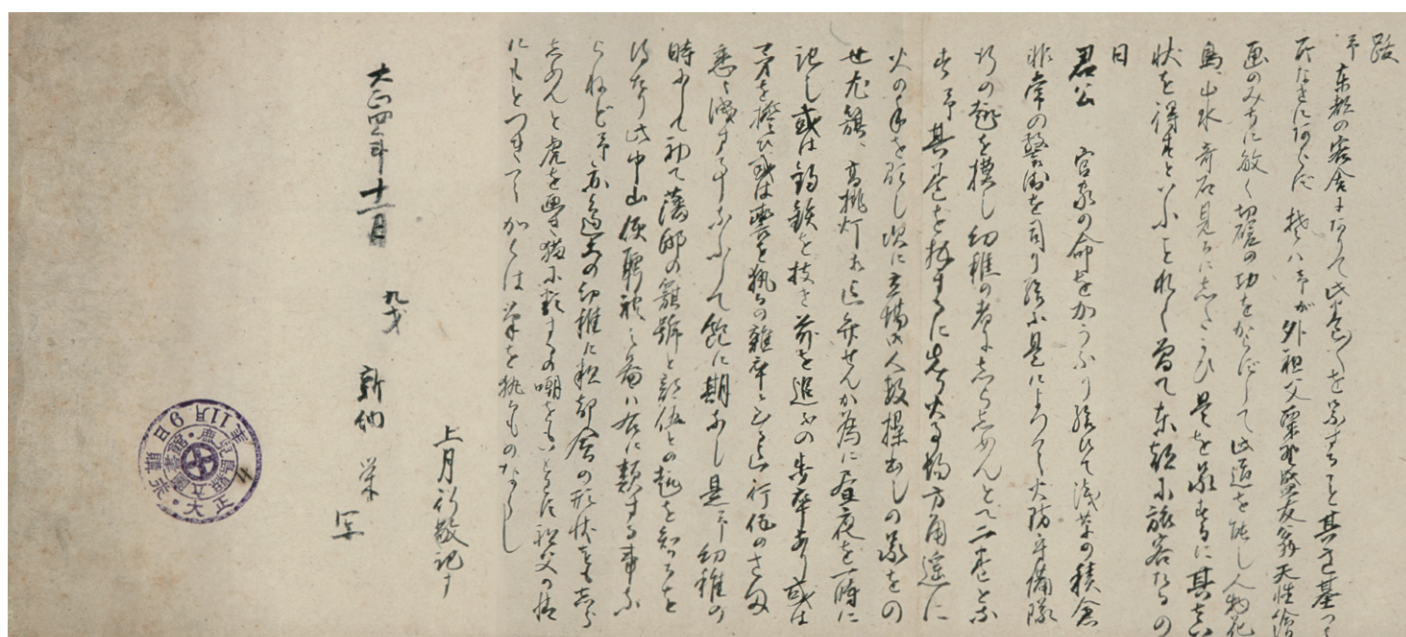
左には種々の樹木が描かれている。下の御門の内側には2棟の二階建ての建物（長屋）が見える。「御屋敷図」によれば「御目付長屋／明／中床」「御草り取定七／下目付定助／小頭治兵衛」と住人の名が記されている。絵巻ではその奥は省略され、稻荷社があることが詞書で示されている（参考図版参照）。文政6年（1823）に寛政の改革で有名な松平定信（白河城主）の子の松平定永が白河から伊勢国桑名へ、桑名の松平忠亮が武蔵忍へ、武蔵国忍藩の阿部鉄丸が白河へという、いわゆる三方領地替が行われ、阿部家は白河を幕末まで治めた。（丹羽謙治）

14 跋文

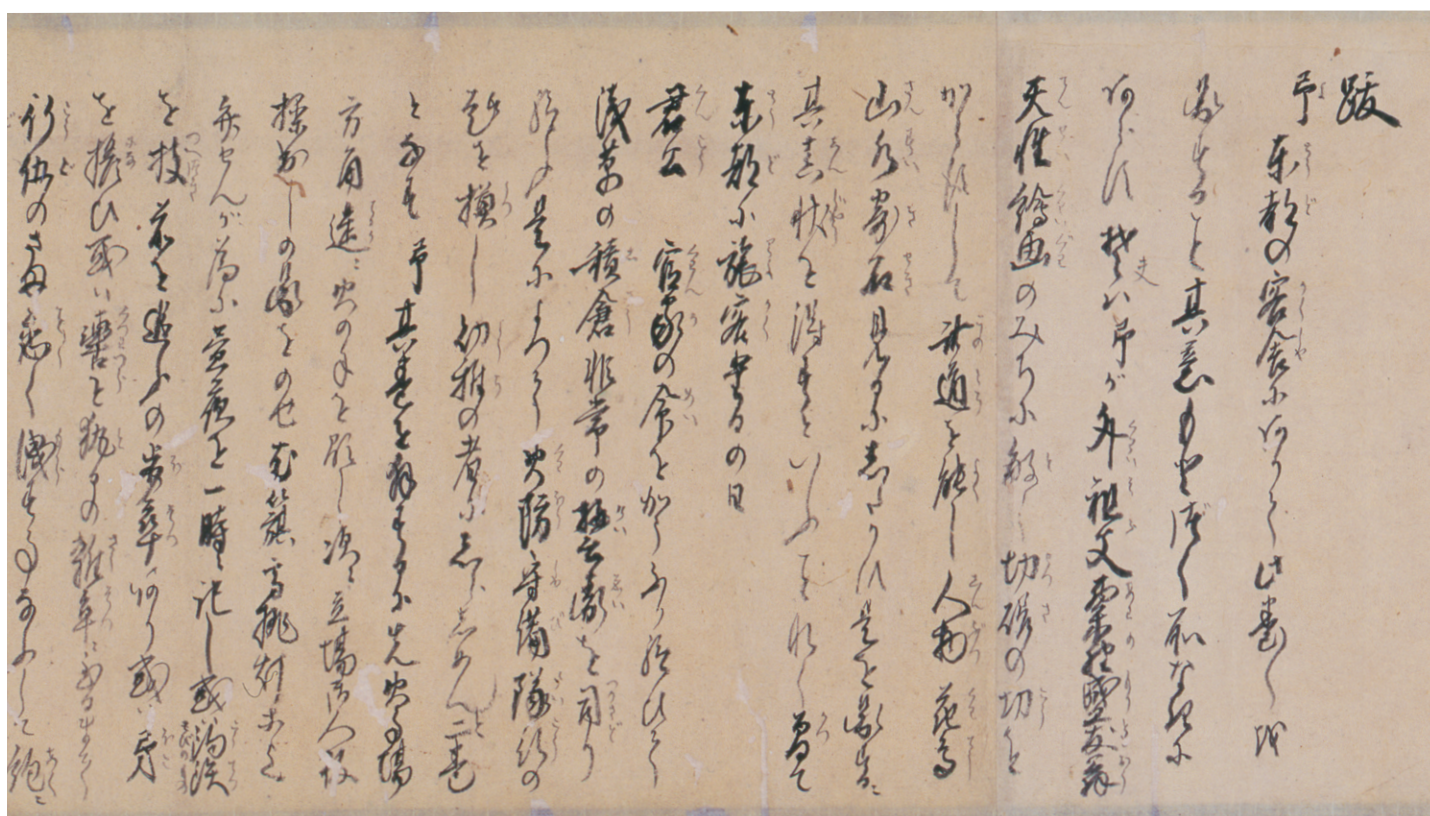
絵巻の筆者である上月行敬^{こうつきゆきよし}による跋文（自筆）。
 外祖父にあたる栗野盛友^{あわのもりと}が江戸浅草御蔵の火の番を務めたとき、得意の画技を用いて火消しの絵巻二巻を作った。それに倣って自分も江戸勤番のときに目にした琉球人参府の模様を「^{へんど}邊土の^{こども}幼稚」（故郷宇和島の子どもたち）にしらしめんために筆を執った、という。行敬は宇和島藩上屋敷の表門周辺の様子を描いたところで、「御国許御家中幼稚之輩^{江戸}江江戸龍土御屋敷前の趣をも拝見致せんと／筆序に又爰に載す」と書いていたことを考えると、「幼稚の者」とは上月の子どもたちといった限定的な対象ではなく、より広く宇和島藩土の子弟に絵巻を見せることを想定していたことが推測される。なお、鹿児島県立図書館本には、この跋文の後に「大正四年十一月 九才 新納栄写」という書入れがあり、「大正4年11月9日購求・鹿児島県立図書館」の青色の受入印が捺されている。



（丹羽謙治）



（参考）鹿児島県立図書館蔵写本の巻末部分



跋

予東都の客舎にありて此巻くを
 圖すること其意もとづく所なきに
 あらず。そハ予が外祖父栗野盛友翁
 天性繪画のみに敏く、切磋の功を
 からずして此道を能く、人物、花鳥、
 山水、寄石、見るにしたかひ是を圖する二、
 其真状を得すといふことなく、曾て
 東都に旅客たるの日、
 君公 官家の命をかうふり給ひて
 淺草の積倉非常の警衛を司り
 給ふ。是によつて火防守備隊行の
 趣を摸し、幼稚の者にしらしめんと二卷
 となす。予其巻を拝するに、先火事場
 方角遥二火の手を踵し、次二立場御人数
 操出しの圖をのせ、尤、簾、高挑灯等迄
 弁せんが為に、昼夜を一時二記し、或ハ鉤鉄
 を杖、前を追ふの歩卒あり。或ハ矛
 を擔ひ、或ハ轡を執るの雜卒二至るまで、
 行伍のさま悉く洩す事なふして飽二
 期なし。是、予幼稚の時にして初て
 藩邸の簾號と部伍との趣を知るを得
 たり。此中山使聘禮之圖ハ右二類する
 事ならねど、予亦邊土の幼稚に粗
 都會の形狀をもしらしめんと、虎を画
 狗に類するの嘲をもいとわす、祖父か
 情にもとつきて、かくハ筆を執る
 ものならし。

上月行敬記ス